

Title	発話解釈に用いられる推論形式の実証
Author(s)	松崎, 由幸
Citation	
Issue Date	2026-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	<a href="https://hdl.handle.net/10119/20511">https://hdl.handle.net/10119/20511</a>
Rights	
Description	Supervisor:橋本 敬, 先端科学技術研究科, 修士(知識科学)

## 推意解釈に用いられる推論形式の実証

2410174 松崎 由幸

発話解釈は、字義的意味の復号だけでは完結せず、話者が何を意図しているのかを聞き手が推論によって補う過程を含む。関連性理論(Sperber & Wilson, 1986/1995)では発話解釈における推論を想定はしているが、具体的な推論形式は明示されていない(吉村, 2016)。一方で、吉村(2016)や Hashimoto(2020)は発話解釈がアブダクションで推論されていると提唱しているが、理論的検討であり実証までは行われていない。そこで本研究の目的は、発話解釈において聞き手がどのような推論形式を用いて解釈を推測するのかを、実証的に明らかにすることである。この目的を達成するために以下の2つのリサーチクエスチョンを設定した。

RQ1：発話の解釈における推論形式の方略はどのようなものか

RQ2：発話の解釈における推論形式の方略には、どのような個人特性が関係しているか

若年成人38名を対象に、理解容易度を3水準(高・中・低)に分類した6種類の会話刺激を用いて実験を行った。参加者は各刺激について直感的解釈を回答し、複数の解釈候補を生成し、最後に最適解釈を選択した。解釈生成過程は思考発話法により収集し、発話プロトコルを3つの推論形式にコーディングした。推論形式は、アブダクション(文脈から意図を仮説的に推測するアブダクション)、帰納・演繹(一般知識や慣習に基づく帰納・演繹的推論)、認知的共感(話者の視点に立って意図を推測する推論)の3種類である。推論形式ごとの使用回数と使用比率を算出し、理解容易度および個人特性との関係を分析した。なお、理解容易度は予備調査の結果に基づき刺激を3水準に分類した。

本研究では2つの仮説を検証した。仮説1「理解容易度が低いほどアブダクションの使用が増える」について、アブダクション使用回数は刺激間で有意差が確認された( $\chi^2(5)=12.40$ ,  $p=.030$ )。しかし、理解容易度の代表値比較では有意差が見られず、平均値の並びも想定順序(高:AB, 中:CD, 低:EF)に沿った単調増加とはならなかった(A:2.74, B:2.82, C:2.16, D:2.03, E:1.95, F:2.61)。したがって、理解容易度はアブダクション使用を単純に増減させる主要因とは言えず、仮説1は支持されなかった。

仮説2「コミュニケーションに関連する個人特性は推論形式の使用パターンと関連する」について、コミュニケーションスキル(ENDCOREs: 解読力・他者受容)は、使用回数においてアブダクションとは相関が見られなかった。一方、帰納・演繹使用回数に有意な正の関連を示した(解読力:  $p=.413$ , 補正後  $p=.050$ ; 他者受容:  $p=.446$ , 補正後  $p=.050$ )。また使用比率では、アブダクション使用比率が有意な負の相関(解読力:  $p=-.456$ , 補正後  $p=.029$ ; 他者受容:  $p=-.439$ , 補正後  $p=.029$ )を示し、帰納・演繹使用比率は有意な正の相関傾向を示した(解読力:  $p=.408$ , 補正後  $p=.055$ ; 他者受容:  $p=.411$ , 補正後  $p=.055$ )。なお、心の理論に関連する尺度も使用したが、有意な相関は認められなかった。以上より、個人特性の影響がアブダクションの増減という形よりも、帰納・演繹の追加という形で現れる可能性が示唆された。したがって、仮説2は部分的に支持された。

加えて、課題の性質(直感/多数回答/選択)が異なっても推論形式の使用傾向が大きく変化しないことが示され、推論形式の選択は課題要求よりも個人差に強く規定される可能性が示唆された。

本研究の結論は、次の三点である。一つ目は、アブダクションは理解容易度や課題の性質に左右されにくく、発話解釈において広く用いられる基盤的推論形式だと考えられる。二つ

目は、コミュニケーションスキルに関連する個人特性は、推論形式の使用パターンと関連する。そして、その影響はアブダクションの増減ではなく、帰納・演繹の追加的動員として現れる。三つ目は、推論形式の選択は刺激や課題の違いよりも個人差の影響が大きく、発話解釈の推論方略は、状況依存的ではなく、一定の安定性を持つ認知スタイルとして捉える必要を示唆する。以上より、発話解釈の推論プロセスは「アブダクションを基盤とし、個人差と状況に応じて帰納・演繹が上乘せされる階層構造」である可能性を示唆する。

今後の課題は次の3つが考えられる。1つ目は、より大規模なサンプルでアブダクションを基盤に帰納・演繹が上乘せされるという方略の再現性を確認する必要がある。加えて、理解容易度と個人特性の交互作用(例:高スキル者ほど困難刺激で帰納・演繹が増えるか)も、十分な検出力のもとで検討することが望まれる。2つ目は、本実験では日本語母語話者かつ学生を対象とした。今後は、年齢層や文化圏・言語の異なるサンプルに拡張し、本研究と同様の結果が得られるかを検証する必要がある。3つ目は、本研究で作成した刺激を多次元(意味的明確性・知識依存性)で整理する必要がある。これにより、どの要因が推論形式の使い分けに影響するか更なる知見が得られると考える。